

松旭齋天一の

新出写真資料について

長野 栄 俊

はじめに

嘉永六年（一八五三）、福井城下で武士の子に生まれた松旭齋天一（本名・服部松旭）は、明治時代を代表する奇術師として国内外で活躍した。

天一は明治四五年（一九一二）に没したことから、二〇一二年は没後一〇〇年の節目の年にあたった。そのため、福井県内では関連資料の展示会をはじめ、マジックの世界大会「天一祭」の開催や生誕地への石碑建立、講演会、マジックショーなど多彩なイベントが催された。筆者の勤務先である福井県立こども歴史文化館でも、二〇一〇年から天一向関する調査を進めており、その成果をふまえて、二〇一二年秋、特集展示「TENTEN GREAT TENICHI」を開催した。

本稿では、この展示会の準備段階で発見された新出資料のうち、特に天一が被写体となった写真資料を紹介していきたい。

これまで天一に関する写真資料といえ、平岩白風『舞台奇術ハイライト』（力書房、一九六一年）や青園謙三郎『松旭齋天一の生涯―奇術師一代―』（品川書店、一九七六年）、松旭齋天洋『奇術と私―明治・大正・昭和の日本奇術史―』（テンヨー、一九七六年）に掲載されたものがほとんど全てと言ってよかった。しかし、この二年間の調査により、これらの書籍に掲載された写真のオリジナル・プリントや未掲載写真など、合わせて数十点の写真が福井県内と東京都内とで発見されるに至った。

二〇一一年一二月、こども歴史文化館のプレス・リリースを受けて、新聞・テレビ各社が「日本最古の手品の写真発見」のニュースを報じ、多くのひとびとが天一一座の演じる奇術「十字架の磔」の写真に関心を寄せた。また、続く二〇一二年六月には「ベルギーで

の天一の写真」発見が、同年一〇月には「彩色された最古の手品の写真」発見が大きく伝えられることとなった。しかし、報道機関向けの情報提供の手法では言及しきれない点も多く、発見の経緯やその後には明らかになったことも含めて資料の紹介を行いたく思い、本稿をなすことにした。

以下、まずは天一ゆかりの写真資料が、没後一〇〇年を経て、生まれ故郷の福井県内から発見された経緯を述べ、発見資料の概要を紹介する。その後で二つのテーマにしばって、新出資料を詳しく取り上げることにした。

一 青園謙三郎と久保満子の邂逅

現在、天一の伝記として基本文献に位置づけられているのは『松旭齋天一の生涯』である（以下『生涯』と略す）。没後一〇〇年を経てもなお、松旭齋天一という人物の生い立ちや業績を知ることができているのは、ひとえに『生涯』の著者・青園謙三郎（一九一九―一九九三）の仕事に依るところが大きい。

青園は昭和三八年（一九六三）ころから天一向関心を持ち始めた。翌三九年一月一六日

には、当時記者として勤めていた「福井新聞」紙上で「福井が生んだ天下の奇術師 松旭齋 天一の周辺」という記事を掲載している。この時点で天一が没してから既に五〇年以上の年月が経過していた。天一は三〇代半ばで生活拠点を東京に移していたことから、福井県内ではゆかりの資料を見出すことができず、調査は難航したようである。先の記事中でも天一情報の提供を呼びかけているほどである。

ところが、昭和三九年（一九六四）ないし四〇年ごろ、青園は天一の四女・久保満子（一八九七—一九七〇）と「奇跡にちかい」出会いを果たし、調査は劇的に進展することになる。

旧姓・服部満子は天一没後の大正六年（一九一七）、福井県坂井郡春江村（現坂井市）に本籍を持つ久保三郎と入籍した。天一は生前、元福井藩家老職の狛家を通じて「自分の娘を福井の人とめあわせたい」と言っていたという。狛家は、天一の父牧野海平が仕えた家であり、服部家からすれば旧の主筋にあたる家である。天一には「自分のこどもを福

井へ残そう」という「夢」があったと青園はみている。^③

その久保満子は戦後になり、夫の本籍地に住むようになったことから、青園との邂逅につながる事となった。そして「天一の夢」は意外な形で大きな実を結ぶことになる。忘れられていた天一の正確な伝記を書きたい、という青園の熱意が通じたことから、満子は「親類をはじめ、かつての天一の弟子でまだ存命中の人々に連絡して、可能なかぎりの資料を集める努力を始めた」という。こうして天一ゆかりの品々が生まれ故郷の福井に集められることになった。青園と満子が出会わなければ、あるいは天一関係資料は散逸を免れなかつたかもしれない。また、天一の弟子・松旭齋天洋と青園との交流も、満子の仲介によるものだった。

昭和四一年（一九六六）四月二日、満子や天洋から提供された資料をもとに、青園は「福井新聞」紙上に「聞き書き松旭齋天一伝」を連載し始める（以下「聞き書き」と略す）。同年七月二七日まで九七回続いた連載では、毎回図版が掲載され、天一を撮った写真やゆかりの

品々の写真が数多く紹介された。このうち「久保満子さん所蔵」としては、以下に掲げる、一五点のゆかりの品の写真が掲載された。^④

- ・第二七回「松旭齋天一の自筆『聊自楽』」
- ・第三一回「天一自筆のだるま画像」
- ・第三四回「天一がつくらせたゆかた地」
- ・第四二回「天一が晩年つくらせた手ぬぐい」
- ・第四三回「松旭齋天一を図案化したもの入れ」
- ・第四四回「天一がだるまをたくさんかいたサイフ」
- ・第五七回「天一のかいた『だるま』」
- ・第六一回「天一のパスポート」
- ・第六九回「イギリス滞在中、公使館の阿部守太郎から天一への連絡への手紙」
- ・第七一〜七三回「天一自筆の帰朝あいさつ原稿」
- ・第七四回「近衛歩兵第一連隊将校団から天一に贈られた絹地の旗」
- ・第八六回「天一が和歌を賛した画帳」
- ・第八九・九一・九二・九四回「牧野家聞書」
- ・第九三回「天一自筆の一族法名」
- ・第九三回「晩年の天一が好んでかいただる

^③若越郷土研究（福井県郷土誌懇談会）

「ま」

昭和五十一年（一九七六）、この「聞書」の内容をまとめ直して一冊の本にしたものが『生涯』であった。この間、満子は昭和四五年（一九七〇）に亡くなっており、青園も平成五年（一九九三）に死去した。この後、満子によって収集された資料の行方を気にかける者はほとんどいなくなってしまった。そして二〇一〇年時点では、天一や奇術史に関心を寄せる者でさえ、「聞書」に掲載されたこれらの品々の所在が全く分からなくなっていたのである。^⑤

二 調査成果の概要

筆者は、満子の収集にかかる天一ゆかりの品々が、今なお久保家に保管されているものと考え、満子の孫・久保正夫氏に御宅の調査を依頼した。

（一）二〇一二年の調査

現在、首都圏に在住される正夫氏のご厚意により、二〇一一年十一月二日、坂井市内の久保家旧宅の調査を行うことができた。

久保家は江戸時代後期には、庄屋や大庄屋を勤めた家であり、越前諸藩に多額の調達金を命じられる豪農でもあった。同じ坂井郡の豪農であり、自由民権運動で著名な杉田定一の実母・隆も、この久保家の出身である。当家には近世から近代にかけての資料が数多く所蔵されていた。^⑥

筆者は満子が所持していた前掲資料が、一まとまりになって保管されているものと予測していたが、残念ながら目論見は外れた。このときの久保家の調査では、満子の遺品を保管したと思われる箱や袋の中から、次の三点の資料がバラバラに見つかっただけで調査は時間切れとなってしまった。

一点目は「聞書」第三四回で紹介された「天一」柄の浴衣であり、二点目が「聞書」では紹介されることなかった黒い写真アルバム、そして三点目が天一の長子・服部薫正に宛てられた絵葉書・書簡群である。

このうちの黒い写真アルバム（以下、「久保アルバム」と仮称）こそが、「日本最古の奇術写真」をはじめ、天一ら奇術師を被写体としたオリジナル・プリントを数多く収める奇術

史上貴重な資料だったのである。また、薫正宛ての絵葉書・書簡群にも、天一の養子にして弟子の松旭齋天一、同じく弟子の松旭齋小天一からの絵葉書が、確認できるだけで九通含まれていた。^⑦

（二）二〇一二年の調査

久保家の二度目の調査は、二〇一二年五月二七日に行われた。この日は公益社団法人日本奇術協会により、福井市順化一丁目の旧大名町に「松旭齋天一誕生の地碑」が建立され、その除幕式が執り行われた。式典に出席するため来福された正夫氏に依頼して、旧宅の再調査をさせていただいた。

この時の調査では、「聞書」に「松旭齋天一の自筆『聊自楽』」（第二七回）、「天一自筆のだるま画像」（第三二回）、「天一のかいた『だるま』」（第五七回）として写真掲載された書画を載せる一冊の画帖が見つかった。ほかに、ベルギーの首都ブリュッセルでの天一を撮影した肖像写真が一点（ブリュッセル写真」と仮称）、天一はじめ松旭齋派の奇術師の写真を取めた赤色のリングフォトアルバムが一

冊(「天洋アルバム」と仮称)、「天一宗家五十年法要記念アルバム(昭和四四年六月八日)」が一冊、青園から久保家に宛てた手紙が一通、「聞書」はじめて天一関係の新聞記事の切抜きなどが見つかった。

これらのうち「ブリュッセル写真」は全くの新出資料であり、謎の多い天一の欧米巡業の一端を説明するものとして興味深く、「天洋アルバム」もまた、天一ゆかりの写真の伝来と普及の謎を解く鍵を握る資料と言える。

以上のように、当初は「聞書」に掲載された写真から、天一ゆかりの品々の所在を確認するために行った調査であつたはずが、結果的には新たに多くの写真資料が見つかることになった。また、この発見とその報道をきっかけとして、いくつかの情報が寄せられ、さらなる新資料の発見にもつながっていったのである。

三 「久保アルバム」と「天洋アルバム」

(一) 「久保アルバム」

二〇一一年に見つかった「久保アルバム」(縦二〇・二×横二八・七cm)に収まるのは、肖

像写真や家族写真が大部分を占めている。すでにほとんどの写真がアルバム本体からは剥離しているため、裏面も見ることができた。「昭和三年／久保美津子／美佐子」や「昭和九年正月三日／三郎 四十三才／美津子 卅八才」といった裏書を確認できることから、本アルバムは元来、久保満子のプライベートなアルバムとして作られたものと推測できる。従つて、満子の父・天一や母・梅乃の肖像写真、兄弟との家族写真も多く含まれているのである。

また、天一一座の集合写真や弟子の天一、天勝らの写真もあり、なかには奇術を演じる写真も数点含まれている。とりわけ、明治二〇年代初頭の天一一座を撮影したと思われる写真や明治三四年～三八年(一九〇一～一九〇五)の足かけ五年に及んだ欧米巡業中の一座の写真、晩年の天一のプライベート写真が含まれていたことは注目される。

この「久保アルバム」のうちの四点は、既に「聞書」や『生涯』『奇術と私』に掲載されたことがある写真であつた。その意味で、これらが見つかったことは、既発表写真の所

在が確認されただけであつて、「新発見」にはあたらない、とする見方ができるかもしれない。しかし、後述するとおり、既に書籍等に掲載された写真は、いずれも複製写真からの掲載だった可能性が高いことから、それらのオリジナル・プリントが見つかったことの意味は大きく、やはり「新発見」だったと言ふことができよう。

また、天一自身が写るものとして四点、欧米巡業中の座員が写るものまで含めると合計五点が、これまでに未掲載の新出写真であり(五五頁写真参照)、家族や弟子だけが写るものまで含めると一〇点以上が新出資料ということになる。

この「久保アルバム」に貼りこまれた写真の一部には不自然な形にトリミングされた形跡が何か所か見られる。また、薄く剥がされて貼り込まれた写真も多いことから、別のアルバムにあつた写真を剥がして貼り直したことをうかがわせる。

(二) 「天洋アルバム」

二〇一二年に発見された「天洋アルバム」

「久保アルバム」中の新出写真

長野 松旭齋天一の新出写真資料について



明治30年代 天一の家族写真



明治37年頃 欧米巡業中の座員
前列が天寿、後列左が天勝、右が麻生まつ



明治42年～44年の一座の写真 前列中央が天一、左端が天二



明治42年以降
前列右が天一、左が天二、後列右が天勝



明治42年以降
前列中央が天一、右が天二、後列右が天勝

(縦二九・〇×横二五・五cm)は、第一紙に「贈呈 久保家／喜翁 松旭齋天洋／昭和四十年初夏」と墨書されていることから、一九六五年、松旭齋天洋(一八八八—一九八〇)が喜寿の祝いとして久保家に贈呈したものであることがわかる。同様のアルバムは、現在把握しているだけでも、河合勝マジックコレクションへの二冊の伝来が確認されており、^⑧親類や奇術関係者に一定数を配布したことが推測できる。

久保家本「天洋アルバム」には、天一、天二、天勝、天洋といった、松旭齋一門の奇術師の写真が四七点貼られている(ただし、三点はキャプションのみで写真が欠落)。一方、河合コレクション本の二冊のうち、欠落の少ない方には四九点の写真が収められている。これらのことから、天洋が配布したアルバムは、ものによって内容が異なるものであったことが見て取れる。

また「天洋アルバム」の特長として、写真の一点一点に、天洋によると思われるキャプションがつけられていることが挙げられる。今となってはわからなくなった撮影年や被写

体の人名が簡潔に示される点において、資料的価値は高い。^⑨

ところで、昭和五一年(一九七六)発行の『生涯』には、天一やその弟子たちを撮影した明治期の写真が一四点掲載されている。このうちの二三点は、昭和四一年(一九六六)の「聞書」連載段階で掲載されたものと同じのものである。^⑩青園はこの「聞書」執筆のための調査を進めるなかで集まった写真を、一冊のアルバムにまとめた。現在、福井市立郷土歴史博物館で所蔵される青園のアルバムをみてみると、キャプションがついた写真を接写したものであることが判明する。このことから、天一の基本文献である『生涯』を紹介して流布した写真のほとんど全てが、元をたどれば昭和四〇年に配布された「天洋アルバム」の写真の複製だったということになるわけである。

ここで「天洋アルバム」と「久保アルバム」の写真を見比べてみたい。「天洋アルバム」のうち一四点が「久保アルバム」のものと同一の写真である(うち二〇点に天一が写る)。しかし、よく見てみると、肉眼でもはっ



欧米巡業中の写真 (左:天洋アルバム、右:久保アルバム)

きりわかる程に「天洋アルバム」の写真の解像度は低く、またプリントの範囲も狭い(右**掲写真参照**)。次章に詳しくみる「十字架の磔」の写真は、いびつな楕円形にトリミングがなされており、背景に黒い台紙が写り込んでいるが、この形状が「天洋アルバム」と「久保アルバム」とで合致する。^⑪これらのことか

^⑧『若越郷土研究』(福井県郷土誌懇談会)

ら考えると、「天洋アルバム」中の天一が写った全ての写真が、「久保アルバム」中の写真の複製だと考えられる。つまり、「久保アルバム」の写真は原版からプリントしたオリジナル・プリントであるのに対し、一方の「天洋アルバム」のものは、このオリジナルを接写してつくられたコピーなのである。

天洋は「天洋アルバム」を配布する昭和四〇年より早い段階で、おそらくは天一の遺族の所蔵する写真から複製をつくった。それがアルバム配布によって奇術関係者などに流布し、更には青園の『生涯』出版によっても広まっていったと考えられる¹²⁾。従って、二〇一年の発見に至るまで「天洋アルバム」の写真が書籍に掲載されたことはあっても、「久保アルバム」の写真が掲載されたことはなかったと言ひ換えることもできるだろう。

四 天一一座の「磔写真」

「久保アルバム」に収まる天一の写真のうち、最も注目すべき写真は「日本最古の奇術写真」とされる「十字架の磔」の写真である(以下「磔写真」と仮称。五九頁写真参照)。

ここでは、この写真発見の経緯と写真の持つ意義、奇術の演目内容について詳しく紹介していきたい。

(一) 「磔写真」の紹介史

まずは「磔写真」が、これまでどのように紹介されてきたかを見ておきたい。

管見の限りで「磔写真」を掲載した最初の文献は、昭和十一年(一九三六)に刊行された『秘宝珍奇図鑑』(東洋文化協会)である。本書は「岩倉具視筆『君ヶ代』」に始まり、「秀吉所用の鞍と鎧」「郵便に関する最初の太政官布告」など、歴史上の人物や事柄にまつわる史料写真を掲載した書籍である。その一四五頁に「松旭齋天一の大奇術」と題して「磔写真」が掲載されている。写真キャプションには「明治二十年前後の写真」とあり、次のような解説がつけられている。

写真に見る十字架上の少女は槍にて刺されて鮮血溢ると見る間に嫣然として微傷もなく再び舞台に進み来るのであるが、実は槍の穂先が柄の中に入り、同時に赤インキを噴出する仕掛であつて、是が又非常なる評

判を得たのであるが後に此演技は禁止されてしまったのである。

ここで注目すべきは、写真が楕円形にトリミングされている点、また「松旭齋天洋師蔵」とある点である。

戦後の文献に目を向けてみると、平岩白鳳『舞台奇術ハイライト』(一九六一年)に「最古の奇術の舞台写真『十字架の磔』」と題して紹介するものが、最も早い例であろうか。以下のような紹介がなされている。

奇術の舞台写真として、もっとも古いと思われる初代松旭齋天一(一八五二—一九二二)の「十字架の磔」を、ご覧にいれよう。天一を大おじさん(祖母の弟)にする松旭齋天洋の所蔵だが、撮した年代や場所ははっきりしない(一一二頁)。

写真は『秘宝珍奇図鑑』と同じく天洋の所蔵品であり、四隅が丸くトリミングされている点も同じである。ここで初めて「もっとも古い」「奇術の舞台写真」として紹介されることになる。

平岩とも交流のあった青園は、昭和四一年(一九六六)の「聞書」第三七回で「最古の奇

術写真」と題して、次のように「松旭齋天洋氏提供」の「磔写真」を掲載した。

ここにきわめて珍しい写真がある。松旭齋天洋氏が秘蔵している天一一座の舞台写真である。説明によると明治十八年（一八八五）の撮影で、日本最古の奇術写真だということだ。

その後、昭和五十一年（一九七六）には青園が『生涯』に「日本最古の奇術写真」として掲載し（七七頁）、同年、天洋もまた自伝『奇術と私』に「明治時代のマジックショーの音楽団（明治二〇年）」と題して「磔写真」を掲載した（五七頁）。

以上のように、「磔写真」は、戦前から天洋所蔵のものが書籍に掲載されており、一九六〇年代には、それが「日本最古の奇術写真」として紹介され始めたことを見てきた。その後、『生涯』と『奇術と私』は、奇術史や芸能史に関心を抱く人々にはよく読まれたため、この写真は著名な奇術の古写真として紹介されていくことになる。

（二）オリジナルと天洋のコピー

明治二十二年（一八八八）に生まれた天洋が、天一一座に入門したのは明治三八年（一九〇五）のことである。従って、明治十八年（一八八五）ないし二〇年前後の写真として紹介される「磔写真」が、天洋自身の写ったものとは考えにくい。しかし、昭和十一年（一九三六）の『秘宝珍奇図鑑』には既に「松旭齋天洋師蔵」として紹介されている。つまり、この時点より前に、天洋は「磔写真」を入手していたことになる。なぜ、自身が写るわけでもない写真を天洋は所持していたのであろうか。

天洋は天一の又甥（姉の孫）にあたる服部家の親戚であることから、天一の没後も遺族と親交を持ち続けた¹⁴。また、後に『日本奇術史』の発刊を企てるほど奇術史に関心を抱いており、師の天一を尊敬する思いも強いことからその顕彰にも熱心であった¹⁵。こうした交流や関心のなか、戦前の早い段階で、天洋は天一やその弟子たちの写真の複製をつくっていたのではないだろうか。それらを整理し、焼き増しして、配布したものが昭和四〇年の

「天洋アルバム」だったのであろう¹⁶。

天洋所蔵の「磔写真」も、これら複製写真のうち一枚である。この写真は『舞台奇術ハイライト』¹⁷や「天洋アルバム」『生涯』『奇術と私』などを通じて流布していくことになるが、元が複製であったことや、出版当時の印刷技術の低さ、図版の小ささも相まって、「久保アルバム」のオリジナル・プリントと比較すると著しく情報量が少ない。例えば、左端に写る大礼服装の天一の頭上に、長方形の物体が掲げられているが、オリジナルでのみ、これが「天一」と書かれた旗だったことが判明する。また、天一の衣装の刺繍の細部や帽子につけられた「OH」の文字（おそらく「TENJOHI」の一部）も、オリジナルでしか確認できない。その意味で、これまで出版物に掲載されてきた「日本最古の奇術写真」のオリジナル・プリントが見つかったことは奇術史研究上、大きな意味を持つことであった。

（三）「彩色磔写真」の発見

「磔写真」のオリジナル・プリント発見の

二つの「礫写真」

長野 松旭齋天一の新出写真資料について



久保アルバム「礫写真」(久保正夫氏蔵 福井県立こども歴史文化館保管)



「彩色礫写真」(東京都江戸東京博物館蔵)

報道は、更に別の「碟写真」の発見にもつながった。

二〇一一年二月、福井市立郷土歴史博物館副館長の西村英之氏から筆者の元に連絡が入った。写真史を専門とする西村氏は、以前、東京都江戸東京博物館で古写真の調査を行った際、彩色された「碟写真」を見たことがあるという。西村氏の見た写真は、幕末明治期の科学技術資料群「赤木コレクション」¹⁸に含まれる横浜写真の一枚だった。

この横浜写真とは、幕末から明治三〇年代の中ごろ、日本の名所風景や風俗習慣を撮影し、手彩色を施して外国人に販売したものをいう。鶏卵紙焼付写真に彩色を施して台紙に貼り、蒔絵の表紙を付けて装丁したアルバムと、ガラス板に焼き付けて彩色した幻灯写真の二形態があった。焼き付けた写真がまだ生乾きにある段階で、写真館所属の絵付師が日本絵具を摺り付けて彩色したのである。¹⁹

西村氏からの情報をもとに、二〇一二年八月二八日、江戸東京博物館で「写真帳JAP AN」(資料番号九〇三六〇四四二)を調査した。写真帳には、蒔絵の表紙(縦二三・四×横

二九・六cm)がつけられ、五〇点の彩色写真が綴じ込まれていた。その四二点目に「217 MODERN JUGGLERY」(近代奇術)と題のついた「碟写真」があった(以下「彩色碟写真」と仮称。五九頁写真参照)。

一見してわかるように、この「彩色碟写真」は、「久保アルバム」の「碟写真」に彩色を施しただけのものではなかった。「久保アルバム」の「碟写真」では、左端に天一が写り、十字架の女性、それを槍で突く男性、その他楽団員ら九人、合計一二人の座員が写っている。これに対し「彩色碟写真」では、天一はほぼ中央に写り、その左側に更に七人の座員が写っているのである。うち一人は槍を構え、一人はラップ、一人はアコーディオンを演奏している。つまり、実際の被写体は一九人であって、十字架の女性を、槍を持った男性が二人がかりで突く形となっている。「久保アルバム」の「碟写真」にトリミングが施されていたことは先述した通りだが、「彩色碟写真」の発見により、写真の本来の形状が初めて明らかになったわけである。

また、この写真が重要であるのは、撮

影した写真館が判明することである。写真帳には標題紙がとじ込まれ、そこには「JAPAN」という題とともに「YOKOHAMA A.FARSARI & CO」の文字が印刷されている。ファルサーリ商会は、明治一八年(一八八五)、イタリア人写真家アドルフォ・ファルサーリ(Adolfo Farsari 一八四一—一八九八)と玉村康三郎によって横浜の居留地で創業した。ファルサーリは明治二三年(一八九〇)に帰国するが、その後もファルサーリ商会の名で経営は続いていく。

天一一座が「碟写真」を横浜のファルサーリ商会で撮影したのだとすれば、それは明治二一年(一八八八)以降のこととなる。なぜなら、確認できる限りで、天一一座はこれより前に横浜に来たことがないからである。

それまで西日本を中心に活動していた天一は、明治二一年正月、名古屋千歳座での興行を皮切りに東海地方を巡業する。そして七月に横浜の曲馬小屋で興行を打ち、十一月一日、初の東京興行を浅草文楽亭で行った。この興行での成功を機に、天一一座の名は広く世に知られることとなる。その後も清国と九州で

興行した期間（明治三二年一〇月～三三年五月）をのぞき、二四年（一八九一）二月までは東京近郊の各劇場で興行を打っていた。座員の一人として写っている松旭齋天一（一八七七―一九二〇）の年格好が一〇歳前後の少年であることからみても、撮影時期は明治二一年七月頃～二四年二月頃（明治三二年一〇月～三三年五月は除く）のことと考えてよいのではないだろうか。従って、「天洋アルバム」やその影響を受けた「聞書」が、「礫写真」を明治一八年の写真としたことは誤りだったと言えよう。²⁰

また、撮影時期の下限を探るためには、「彩色礫写真」につけられた「217 MODERN JUGGLERY」というタイトルも手掛かりになりそうだ。横浜写真はネガ自体にタイトルが付けられることが多いという。ファルサーり商会の場合、「アルファベット+算用数字+表題」の形式で整理番号をつけることが多かったが、初期にはアルファベットを付けない時期があった。²¹従って、タイトルにアルファベットを伴わない「彩色礫写真」は、初期ファルサーり商会の作品と考えられ、先

撮影時期の推定を補強する。²²

ところで、天一は、明治三四年（一九〇二）の渡米以前にも、米国や欧州諸国を漫遊したことがあると語っていた。²³この点について外務省外交史料館の海外旅券下付記録を調査した結果、実際に天一が旅券を下付された最初は明治三二年（一八九九）の清国行きるときであった。²⁴欧米諸国へは、やはり明治三四年までは渡航した形跡が認められず、これ以前の洋行の文言は単なる宣伝文句だったと考えられるのである。²⁵しかし、「彩色礫写真」が日本土産の横浜写真として撮影されたということは、すなわち天一自身の洋行より先に、天一の写真だけが先に「洋行」を果たしていたことになる。²⁶

また、この写真は横浜写真として輸出された以外にも、国内向けに、劇場や興行主に対する興行内容の「手見せ」的な役割を担ったものとも推測できる。

（四）「十字架の礫」の内容

「彩色礫写真」が見つかったことで、舞台上の全貌が明らかになったが、この「十字架の

礫」と呼ばれた奇術はどのようなものだったのだろうか。この奇術の現象を紙上で再現した秦豊吉『明治奇術史』（私家版、一九五二年、四九頁）と天洋『奇術と私』（二四～二五頁）とでは、後半部分の演出が少し異なって叙述されている。以下、いくつかの資料を用いながら詳しく見ていきたい。

この演目は、江戸時代以来の伝統的な日本手品には見られなかったものである。²⁸開国以降、外国人奇術師の来日や日本人奇術師の渡航、西洋手品伝授本の刊行などに伴い、日本でも西洋手品が演じられるようになる。

西洋手品を標榜するうえで、奇術師たちは「西洋らしさ」の演出に、しばしばキリスト教的モチーフを用いた。「十字架の礫」の演目もその一つである。天一が演じるようになる以前にも、何人もの奇術師が十字架の演目を演じていた。早い例では、明治九年（一八七六）七月二四日の「仮名読新聞」に「寄席高麗亭は普天齋正一といふ者が出席（略）彼正一先生が十字架に懸かり見物に槍で突かせ」という記事が掲載されている。²⁹また、中村市徳一座による明治一五年（一八八二）

一月一日からの大阪朝日座興行の絵ピラ（河合勝マジックコレクション）にも、十字架に逆さ吊りにされた男性が、両脇から槍で突かれる演目が描かれており、タイトルには「耶蘇三代のけぬ罪の業事」とある。

このように西洋手品の代表的な演目の一つとして演じられた十字架の奇術であったが、天一自身が演じたものとしては、明治二十二年（一八八八）三月六日の「金城たよ里」の記事が、確認できる限りでは最初である。岐阜興行について「当時伊奈波国豊座に興行する手品師松旭斎天一は十字架の手術杯頗る奇体の事をなすより毎夜大繁昌なり」と報じ、遅くともこのころ既に天一が十字架の奇術を演じていたことがわかる。

同年十一月一日～二月一八日の東京文楽亭興行の宣伝チラシには詳しい演目内容が載せられ、「十字刑ノ磔水張桶電光月ヲ躰シ霞抜ケ早替リ」という文言が見えている³⁰。また、この興行時のものとされる絵ピラも現存しており、ここにも十字架の演目の様子が描かれている（下段図版参照）。このほか、明治二〇年代の新聞記事などに伝えられた演目の様子



文楽亭興行の絵ピラ（部分）（河合勝マジックコレクション）

と今回の「彩色磔写真」とをあわせてみると、おおよその次のように演目内容を再現できるのではないだろうか。

まず、舞台上には十字架を中心に左右にラッパやアコーディオンを演奏する楽団が居並ぶ。天洋は「楽器を舞台で使用したのは

日本では天一先生が初めてである」と述べているが³¹、全員洋服姿の楽団員は、それだけでも西洋手品の雰囲気作りに寄与したであろう。その他、首からロザリオをさげた者やサーベルを手にした者、聖書らしき洋書を手にした座員もみられる。

そこへ女性が紫繻子の耶蘇服を着て登場する。女性は耶蘇服を脱がされ、白衣で十字架に縛り付けられた後、麻酔薬を嗅がされて眠らされる。この時点で女性の白衣は乱れ、「彩色磔写真」では乳房も露わな様子が認められる。

大礼服姿の天一の命令により、女性は両脇から槍で突き刺される。腹、脇腹、喉などから血が流れ出し、女性は悲鳴をあげて息絶える。「彩色磔写真」にも二筋の流血が赤く彩色されているように、当時の天一の奇術では流血や悲鳴による「残酷さ」が一つの売りになつていたようである。この演目は「余り残酷に失ってみるに忍びざらしむ」³²と新聞で評されたり、「予は望む斯る残酷見るに忍びざる技術の如きは社会風致上及徳性涵養上其筋に於て断然禁止せられんことを」³³といっ

た投書がなされたりもした。

絶命した女性の体は十字架から下され、透かしの台上にある桶に入れられる。この先は幾つかのパターンがあったようである。桶に水が注ぎこまれ、鉄砲で撃たれてどめをさされたり、あるいは桶を釘づけにされたりする。そして蘇生させるために電気を通すこともあったようだが、最後は桶に入れられたはずの女性が、桶を脱け出し、衣装を袴やドレスに着替えて花道から現れたり、鶴に乗って宙乗りで現れたりする。最後に一礼後、演目は終了する。

つまり、奇術の現象としては、写真に写る十字架上の女性が槍で突かれて流血、絶命する場面よりも、その後の桶に入れられた女性が蘇生し、着替えて脱出する「霞拔ケ早替り」の場面がより重要だったと言える。この点を踏まえて、明治二〇年代の天一一座の興行を伝える新聞記事を検索してみると、「岐阜日日新聞」明治二五年（一八九二）一〇月三日、大垣町高砂座興行の記事に「耶蘇蘇生霞拔ケ」とあるのも、また「日出新聞」明治二八年（二八九五）五月一日、京都市常盤座興行の

記事に「耶蘇蘇生」とあるのも十字架の奇術を指すことがわかる。明治三一年（一八九八）の絵ピラ（こども歴史文化館蔵）や翌三二年の絵ピラ（河合勝マジックコレクション）には描かれていないことから、天一一座では明治二〇年代の大ネタの一つとして「十字架」の演目が演じられていたと見てよいだろう。

奇術好きで知られた詩人・萩原朔太郎（一八八六—一九四二）は、「松旭齋天一の奇術」という随筆を残しており（『文藝春秋』一九四一年六月号）、文中に十字架の奇術の思いつきを書いている。少し長くなるが、引用する。

僕が幼い子供の時見た物で、忘れがたく印象に残つてゐるものが二つある。一つはチヤリネの曲馬で、一つは松旭齋天一の奇術である。（中略）若い洋装の女を十字架にかけてハリツケにし、槍で両脇を突いて殺すのを見た。槍で突かれる毎に、女は悲鳴をあげて泣き叫び、血がたらたらと流れ出した。これは女の上衣の脇の下に、血糊を入れて袋が隠してあり、それを槍で突いて破るのだから、奇術でも手品でも何でもな

く、普通のありふれた芝居にすぎないのだが、女の洋装が異国趣味の上に、背景が西洋風の墓地になつて居り、青白い月が出て居たりするので、何となく西洋怪談といふ感じがした。女の息が絶え果ててから、屍体をおろして棺桶の中に入れ、周囲を固く釘づけにする。それから後が手品になつて、

天一が早変りで坊主（これは日本の坊主である）になり、何か経文を称へてゐる中、今殺されたばかりの女が、目も醒めるやうな美装をして花道から笑ひながら出て来るといふ仕組であつた。奇術としては、今日天勝等のよくやるトランク抜けの原型であり、甚だ幼稚のものに過ぎないのだが、その奇抜で斬新な舞台意匠は、全く天一の独創になり、今の手品とは大にちがつて、甚だドラマチックに魅力的のものであつた。

前橋に生まれ育つた朔太郎が、天一一座の興行を見たのはいつのことだったか。現在、確認できる限りでは、明治二四年（一八九一）春に天一一座が前橋を訪れている。朔太郎はこの時、五歳だったから思ひ出の内容には思ひ違いもあるかもしれない。しかし、明治の

人々にとって、十字架の奇術がどのように受け止められていたかを知ることができる一文と言えよう。

五 加藤拓川と「ブリュッセル写真」

二〇一二年一月、大阪府で写真事務所を構えるカメラマンの梅原章一氏からこども歴史文化館に連絡が入った。大阪府立弥生文化博物館で開催中の「子規の叔父「加藤拓川」が残した絵葉書」展³⁴に、天一に関する資料が何点か出陳されているという内容であった。梅原氏は「加藤拓川関係文書」の整理・調査を手がけるなか、天一の写真発見に関する報道に接して、館への連絡を思い立ったということだった。

加藤拓川は、本名を恒忠（一八五九—一九二三）といい、明治・大正期に活躍した外交官・政治家である。³⁵正岡子規の母・八重の弟にあたり、子規の叔父ということになる。また、拓川の三男・忠三郎が子規の妹・リツの養子となったことから、現在は忠三郎の二男・正岡明氏が子規の家を継いでいる。正岡子規研究所を主宰する明氏は、実祖父・

拓川にまつわる資料群「加藤拓川関係文書」も継承しており、弥生文化博物館で展示された絵葉書群はその一部にあたる。

司馬遼太郎が『ひとびとの足音』において「拓川は、友達とつきあうために人の世にうまれてきたのではないかと思われるほどに、人というものが好きであった³⁶」と評した通り、拓川は幅広い交友に生きた人物だった。その多彩な交友を物語る数多くの書簡や写真、数千通の絵葉書が正岡氏のもとに伝えられている。なかでも滞欧中の外交官や軍人、学者などからの絵葉書が多く含まれているのは、拓川が一九〇二年二月から一九〇七年五月まで、駐ベルギー特命全権公使を勤めていたためである。

（二）公使館芳名録

「加藤拓川関係文書」には、ベルギー公使館の芳名録が伝来している。このなかの明治三七年（一九〇四）四月二四日の箇所に「奇術士松旭齋天一 服部松旭」という署名が見られ、以下、同筆で一座全員の名が「山口肇、服部勝蔵、同まつ、中井かつ、同とし、高瀬

清」と記されている。これにより、天一一座がベルギーの首都ブリュッセルを訪れていたことが明らかになった。また、欧米巡業中の一座の座員についても、いくつかの興味深い事実が見えてきた。

欧米巡業のメンバーについて、『明治奇術史』や『生涯』『奇術と私』に記載される人名に誤りがあったことが、これまでも指摘されている。松山光伸氏は外務省外交史料館蔵の旅券下付記録から、明治三四年（一九〇二）の正確な渡米メンバーを特定した。³⁷服部松旭（天一）、服部勝蔵（天二）、中井わか（天若）、中井かつ（天勝）、北島とし（天寿）、渡辺久次郎（天久）、高瀬清（天清）そして通訳の山口肇の八名である。ベルギー訪問メンバーには、中井わかと渡辺久次郎の二人が抜けていることになる。渡辺は渡米直後に一座を離脱したとされる人物であり、わかには米国巡業中の新聞に座員の一人として名前が見えるものの、その後の渡欧には何らかの事情で同行しなかったものらしい。

また、この芳名録により、一座に新たに「服部まつ」が加わったことがわかる。まつ

は欧米巡業中に勝蔵(天二)と結婚したとき
れる麻生まつのことである。ヨーロッパ巡業
を終えた一座は一九〇四年一〇月五日、再び
ニューヨークに到着する。この時のエリス島
の入国記録に「Aso, Miss Maku」の名が見
え、姓は麻生のままで敬称も未婚者のものとな
っている³⁸。入籍の手続き等の都合で、実
際に姓が服部に変わったのは後日のことかも
しれないが、公使館訪問時に「服部まつ」と
記されていることから、この時既に勝蔵(天
二)とまつとは事実的な婚姻関係にあったも
のとみてよいだろう。

芳名録にある「中井とし」は、旅券下付記
録の「北島とし」にあたる。松山氏が明らか
にしたように、としは中井わか・かつ姉妹の
妹だったものが、北島家に養女に出されてい
た³⁹。としは、かつ(天勝)にとつて実妹であ
るため、他の座員もかつの妹として接してい
たのであろう。そのため、天一が芳名録に署
名する時に、うっかり姓を中井かつと「同」
としてしまったものと考えられる。

(二) 拓川宛の絵葉書

「加藤拓川関係文書」には、芳名録以外にも
拓川と天一の交流を示す資料が見つかってい
る。梅原氏の調査により、天一が拓川に宛て
た絵葉書が四通確認された。

日本での絵葉書の流行は、明治三九年
(一九〇六)の日露戦争戦勝による記念絵葉書
に端を発し、翌年の郵便法の改正が拍車をか
けたが、欧州では一足早く絵葉書がブームと
なっていた。以下に掲げる(ア)～(エ)の
天一の絵葉書も、こうした流行のなかで出さ
れたものであろう(六六頁図版参照)。

(ア) 一九〇四年二月二三日、オーストリア・
ハンガリー帝国のプラハ(現チェコ共和国)
カルリンで投函された絵葉書。観光地の写
真絵葉書であるが、プラハではなく、フラ
ンスのものである。「SAINT-MAURICE」
(パリ近郊のサン＝モリス)、「Buste
d'Eugène Delacroix」(ウジェーヌ・ドラクロ
ワの胸像)の文字が印字され、当地出身の
画家ドラクロワの胸像が写っている。内容
は、天一の依頼に対応してくれた拓川への
礼状である。依頼の具体的内容までは書か

れていないが、来る四月のベルギー訪問に
ついて、何らかの依頼をしたものかもしれ
ない。

(イ) 一九〇四年九月一九日、イギリスのロ
ンドンで投函された写真絵葉書。打掛に袴
姿の天一が、西洋人を相手にサムタイを演
じている様子が印刷されている。枠外には
「TEN-ICHI JAPANESE MAGICIAN」(日
本人奇術師天一)の文字が印字されており、
枠内には左下端に「Co」の文字が見える。
九月二八日の汽船で欧州を離れるため、そ
の暇乞いをする内容である⁴⁰。

(ウ) 一九〇四年二月二三日、アメリカの
ニューヨーク州ブルックリンで投函され
た年賀状で、天一一座の五人が水芸を演
じる写真絵葉書。写真枠外に「TEN-ICHI
TROUPE OF MAGICIANS」(奇術師天
一一座)の文字が印字されている。(イ)と
デザインが同じで、写真右下端に「SWAN
Co」の文字が印字されていることから、
一連のシリーズとして天一がSWANとい
う印刷会社で作らせたものと考えられる。
なお、「久保アルバム」中にも同じ日付、

天一が拓川に宛てた絵葉書と「ブリュッセル写真」



(ア) 1904年2月22日投函



(イ) 1904年9月19日投函



(ウ) 1904年12月23日投函



(エ) 1906年1月3日投函



「ブリュッセル写真」1904年4月25日撮影
久保正夫氏蔵 福井県立こども歴史文化館保管

(ア)～(エ) 正岡明氏蔵

同じ絵葉書による年賀状が伝わっている。^④

(エ)一九〇六年一月三日、東京で投函された年賀状。「TEN ICHI PROFESSOR OF MAGIC」(天一・奇術教授)と書かれた天一の肖像画の周囲に三つの奇術の演目が描かれる。枠外上部には「MAGICIAN PATRONIZED AND GIVEN GOLD MEDAL BY H.I.M.」(日本の天皇陛下から庇護を受け、金メダルを賜った奇術師)の文字が印字され、右下には「STROBRIDGE LITHOGRAPHING Co.」と印刷会社の名前もみられる。STROBRIDGE社は、当時アメリカで活躍していた一流マジシャンのポスターを数多く制作した会社として知られる。^⑤の絵葉書のLevitation(空中浮揚)やSpirit Cabinet(スピリット・キャビネット)下の図柄は、同社が制作したハリリー・ケラーの一九〇四年と一九〇〇年のポスターの図柄に酷似している。^⑥あるいはこの絵葉書も元々はポスターとして制作されたものかもしれない。

以上四通のうち、(ア)のみは一九〇四年四月のベルギー訪問以前のものである。つま

り、天一はベルギー大使館を訪れる前から加藤拓川と交流を持っていたわけである。「加藤拓川関係文書」に伝わるアルバム中に、名刺代わりに交換したと思しき「服部天一」の肖像写真が貼り込まれている。そこには「1901」と西暦が墨書されていることから、渡米以前、すでに天一と拓川が交流を持っていたことを示している。

(二)「ブリュッセル写真」

拓川の子孫宅だけでなく、天一の子孫・久保家からも、天一の一九〇四年ベルギー訪問を裏付ける写真が見つかった(六六頁写真参照)。満子の遺品から見つかった「ブリュッセル写真」(縦一・九×横八・九cm)は、椅子に腰かけ、タバコを燻らす天一を撮影したものである。裏書に「一千九百〇四年四月廿五日／白耳義国ブルセル日本公使館にて／日本全権公使／加藤恒忠君写之」とあり、拓川がベルギー公使館で撮影したものであることがわかる。

天一が左手に持つ象牙製と見えるシガレットホルダーには動物の彫刻があり、古美術や

道具類に目がなかった天一の趣味をうかがわせる。^⑦また、同じ左手小指には、大粒のダイヤモンドらしき指輪も見える。欧米巡業で稼いだ分をダイヤモンドに換えたというエピソードを裏付ける写真といえよう。^⑧

天一と外交官との交流については、英国特命全権公使(後に大使)を勤めた林董との親交が知られる。「久保アルバム」には囲碁に興じる林と天一の写真が残されている。また、英公使館員・阿部守太郎から天一に宛てた手紙には、林公使以下館員二名がロンドンのアルハンブラ劇場に招待されたことが書かれていた。^⑨

残念ながら、現時点では、天一と拓川の交流の具体的内容を示す書簡や日記類を見出すことができない。そのため、天一のベルギー公使館訪問の理由はわからないままである。ベルギーの新聞や雑誌も未調査であり、天一一行のベルギー入国が公演のためだったのか、それとも単なる観光のためだったのかも定かではない。しかし、もしブリュッセルで一座の興行が行われたのだとすれば、その支援を依頼するための公使館訪問であったこ

とは疑いないであろう。一九〇〇年に渡欧した俳優・川上音二郎のパリ万博公演を、パリ公使の栗野慎一郎らが支援し、公演を成功に導いた例もあり⁴⁶、芸人の海外興行を成功させるための条件の一つが外交官の協力にあった。天一も、拓川以下公使館員に諸々の協力を仰いだのではないだろうか。

また、拓川との交流を示す一連の資料の発見は、不明な点の多い天一のヨーロッパ巡業の足跡についても、いくつかの手掛かりを与えてくれた。

青園『生涯』は、天一のパスポートの記載から、一座の英仏独訪問を推測したが、「どの国からさきまわったのかわからない」とするにとどまっている⁴⁷。一方、松山氏はパリのカジノ・ドウ・パリ（一九〇三年二月ころ）とロンドンのアルハンブラ劇場（一九〇四年八月初旬〜九月二三日）での興行時期および欧州を離れた日付（一九〇四年九月二八日）などを特定した。しかし、日本の新聞で伝えられたベルリン、デュッセルドルフ、パリ、アムステルダム、ウィーンでの興行については、過密な日程故これらの都市での公演日程を疑

問視している⁴⁸。両氏の成果をふまえ、今回の発見資料をあわせてみると、現在判明する限りで、天一の欧州巡業の足跡を以下のように示すことができるだろう。

一九〇三年
八月 ロンドン *
九月 ベルリン *
一〇月 デュッセルドルフ *
一一〜一二月 パリ
一二〜一月 アムステルダム *
一九〇四年
一〜二月 ウィーン *

二月 プラハ（二月二三日）
四月 プリュッツェル（四月二四〜二五日）
七月 デュッセルドルフ *
八〜九月 ロンドン（九月一九日）
九月二八日 リバプール出港、米国へ

（）内は絵葉書投函日と芳名録の日付
*印は日本の新聞に記載されるだけで、現地の新聞・雑誌等での確認はまだとれていない。

おわりに

本稿では「久保アルバム」の発見に端を発

し、その後芋づる式に見つかった「彩色磔写真」や「加藤拓川関係文書」中の天一関係資料、「プリュッツェル写真」など、天一の写真資料を中心に紹介してきた。これら未公開資料は、これまでの天一の伝記や明治奇術史の間隙を埋める資料であり、また一部書き換えを迫る資料でもある。今後の研究の進展に大いに活用されることを望みたい。

最後になるが、筆者が公務中に某記者から受けた質問で、その時は満足な回答ができず、その後も気になり続けていた点について述べ、本稿を終えることにしたい。

「久保アルバム」の「磔写真」発見のプレスリリースは、「日本最古の手品の写真を発見しました！」の見出しで行ったが、その記者は「磔写真」は本当に「最古」なのか、また「発見」とよぶに値するのか、という質問を投げかけてきた。後の質問については、「磔写真」が著名な写真であり、既に書籍等にも掲載されていたことをその記者が知っていたため、このような問いになったのであろう。この質問への回答は本文中で詳述したのでここで繰り返すことはしないが、最初の質問について

は、少しだけ説明が必要であろう。

実は天一より前に、写真の被写体となった日本人奇術師は何人も確認されている。また、そのうちの何枚かの写真は、奇術を演じる姿を撮影したものであった。

三原文『日本人登場―西洋劇場で演じられた江戸の見世物―』（松柏社、二〇〇八年）の一八七頁に掲載された写真は、リズリー一座（帝国日本人一座）の一員として渡航した隅田川浪五郎が被写体となっている。一八六七年夏、フランスの写真館で「浮かれ蝶の曲」を演じる様子が撮影されたものである（ハーバード大学ホートン図書館蔵）。また、松山光伸『実証・日本の手品史』五八頁に掲載された写真「渡豪時の治三郎」は、レントンとスマイスのグレート・ドラゴン一座に参加していた柳川蝶之助（後の三代目柳川一蝶齋）を写したものである。これは一八六七年オーストラリアで「「みょうと」」を演じる様子を撮影したものである。

このように幕末に海外渡航を果たし、海外公演を行った奇術師たちが、すでに手品を演じる様子を撮影されていたのである。その意

味では、これらの写真は「「磔写真」」と比べて二〇年以上も古い奇術写真ということになる。しかし、これらの写真はいずれも海外で撮影されたものであり、現在も海外で所蔵されるものである。その意味において、「「磔写真」」は「現時点における」という条件付ではあるが、「国内で撮影された国内現存最古の奇術写真」と言い換えることができるであろう。

現在、筆者は、まだ十分に明らかにされたとは言い難い天一一座の興行の足跡を追っている。国内の興行足跡をたどるだけでも道半ばの状態にあるが、明治三四年～三八年（一九〇一～一九〇五）の欧米巡業の足跡についてはまだまだ分からないことが多い。幕末から明治にかけて海外で活躍した浪五郎や蝶之助らの足跡については、倉田喜弘氏・三原文氏・松山光伸氏らの非常に優れた先行研究がある。また、明治期の奇術を含めた国内の演芸・見世物の興行記録については、倉田氏や蹠蹠庵主人氏が博搜・渉獵した成果がある。筆者もこうした諸先学の業績に導かれながら、より正確な天一の興行記録をまとめあげ、ひいては松旭齋天一の評伝執筆につな

げたいと考えている。大方のご意見・ご叱正を仰ぐこととしたい。

注

(1) 福井県立こども歴史文化館において、速報展「新発見！松旭齋天一の資料展」（七月二十八日～九月二日）と特集展示「THE GREAT TEN: 〇五」世界にかけたマジック天下一の夢」（一〇月六日～一二月二五日）が、福井市立郷土歴史博物館では、館藏品ギャラリー「松旭齋天一と福井」（七月三十一日～九月三〇日）が開催された。

(2) 天一の父牧野海平と主家狛家については、拙稿「松旭齋天一と福井藩陪臣牧野家―再読『松旭齋天一の生涯』」（『若越郷土研究』五六卷二号、二〇二二年）を参照。

(3) 「福井新聞」昭和四一年（一九六六）四月八日「聞き書き松旭齋天一伝」第七回。

(4) 後述のように、第二七回・三一回・五七回の写真は、一冊の画帳に収められた書画だったことが後に判明する。

(5) 満子所蔵の資料を含む天一関連資料を撮影した青園の取材アルバムが福井市立郷土歴史博物館に寄贈されており、資料の概要を知ることができ

た。

(6) 「久保文苗家文書」として『福井県史』で紹介され、現在その一部が複製本として福井県文書館で公開されている。本文書群は、藤野立恵「丸岡藩に於ける天保八年（一八三七）の改革」（『福井県地域史研究』五号、一九七五年）、同「越前における一豪農の盛衰」（『福井県地域史研究』七号、一九七七年）などで研究対象とされてきた。なお、この日の調査は、文書館と合同で行われ、同館に運び込まれた資料は、現在、整理が進められている。

(7) 差出人が「Tanj Troupe」（天二座）と記された一九〇六年の八通の葉書は、松旭齋天二からのもので考えられる。

(8) 河合勝マジックコレクション本には、久保家本のような墨書は見られない。

(9) ただし、キャプション内容に明らかな誤りもみられる。

(10) 「生涯」には「晩年の松旭齋天一」「梅乃夫人」「松旭齋天二」「松旭齋天勝」「松旭齋天一一座」「ナイヤガラ瀑布での記念撮影」「アメリカでの舞台姿」「米人女優と天一ら」「舞台姿で記念撮影の天一」「アメリカの雑誌に載った天一一座の水芸」「開

基に興ずる林董（駐英公使）と天一（以上口絵）、「日本最古の奇術写真」（七七頁）、「御前公演のため天一が特別注文した洋服」（一〇五頁）、「松旭齋天一（向って右）と浜野茂」（二二二頁）の四点が掲載される。このうち「御前公演」の写真のみ「開書」には掲載されていない。

(11) ただし、「天洋アルバム」の写真は撮影範囲がせまいため、左右部分のトリミングの形状が確認できるだけである。

(12) 「天洋アルバム」系と思われる写真を掲載する書籍に、加太こうじ「天下一の奇術師―松旭齋天一と天勝」（尾崎秀樹編『明治の群像 〇 乱世の庶民』三一書房、一九六九年）、南博「手品の宇宙誌」（『新劇』三二一―三二二号、一九七九年）、倉田喜弘「明治大正の民衆娯楽（岩波新書）」岩波書店、一九八〇年）、金沢天耕編『写真が語る日本の奇術 松旭齋編』（私家版、一九九二年）、面谷幸男編『写真が語る日本の奇術 昭和編』（私家版、一九九二年）などがある。なお、二〇一二年刊行の藤山新太郎『天一一代―明治のスーパーマジシャン』（N T T出版）に掲載された天一の写真は、「久保アルバム」から掲載したものである。

(13) 河合勝氏のご教示による。

(14) 『奇術と私』によれば、大正一〇年（一九二一）、天一の妻・梅乃が亡くなった際も、天洋が葬儀を出したという（二〇二頁）。

(15) 『奇術と私』一―二頁。

(16) もともと天洋が所蔵していた「礫写真」を、何らかの機会に久保満子に譲渡した可能性も否定できない。しかし、それならば昭和四〇年に贈呈した「天洋アルバム」のように複製写真で十分だったのではないか。

(17) 本書掲載の写真キャプションには「松旭齋天一（左端）の舞台面「十字刑の礫」（中央風琴を持つのが天一の妻の梅乃―原画は横三五cm、縦二八cmある）」と写真の大きさが示されている。オリジナルの大きさが横約一七・五cm、縦約一五・五cmであることから考えても、天洋所蔵の写真はオリジナルを引き伸ばして複製したものという見方を補強する。

(18) 同コレクションについては『科学技術黎明期資料―赤木コレクション―江戸東京のモノづくり』（東京都江戸東京博物館調査報告書 第一九集）（東京都、二〇〇七年）を参照。

(19) 横浜写真については、斎藤多喜夫「横浜写真の世界」（『増補』彩色アルバム 明治の日本―

『横浜写真』の世界―有隣堂、二〇〇三年）、同『幕末明治 横浜写真館物語（歴史文化ライブラリー）』（吉川弘文館、二〇〇四年）を参照した。

(20) 明治一九年（一八八六）二月九日、ファルサーリ商会は火災で全焼し、すべてのネガを失ったため、ファルサーリは中山道を中心に、東は日光、西は京都・伊勢に及ぶ五か月の撮影旅行を行った（『横浜写真館物語』一九四頁）。この時期、天一は西日本を中心に活動していたため、ファルサーリが撮影旅行先で「彩色礫写真」を撮影した可能性はゼロではない。しかし、一座の規模や撮影目的を推測すると、やはり東京進出を果たす前後の時期に横浜で撮影されたと考えざるべきであろう。

(21) 『増補』彩色アルバム 明治の日本 二二二頁。

(22) 「久保アルバム」の「礫写真」にはタイトルがついていない。ネガ自体にタイトルがついているのであれば、「久保アルバム」の写真にもついているはずである。位置から見て、トリミング以前にもついていたと考えられ、なお疑問が残る。

(23) 「西洋奇術士松旭齋天一之伝」（『技芸偉観』山田恭太郎、一八九四年）や「松旭齋天一を訪ふ」（『北國新聞』明治三二年（一八九九）八月一日）、

「松旭齋天一の談話（四）」（『土陽新聞』明治三四年（一九〇一）五月三日）では、三か年間、欧米諸国を漫遊した後、明治一六年（一八八三）に帰国したとある。また、「天一の奇術談」（『奇坊』改良手品』盛文館、一九〇一年）にも明治一五年（一八八二）三月から明治二一年（一八八八）春にかけて、米欧諸国およびインドを漫遊したと述べている。

(24) 外務省外交史料館の明治二二年（一八八九）の旅券下付記録で「二〇五六九 服部松旭、二〇五七〇 同梅野、二〇五七一 同勝三、二〇五七二 同ウタ」の四人の名前を確認したが、渡航した座員は他にもいたはずである。なお、服部ウタは、幼少の天一とともに越前から阿波に渡った海平の次女うたを指すか。

(25) 天一が漫遊していた期間にあたる明治一五年（一八八二）二月一九日の「愛知新聞」に「當時大須の真本座にて興行中なる西洋手品一天松旭齋の一座は随分評判も宜しき様子なる（以下略）」との記事がある（「一天松旭齋」とあるが「松旭齋天一」の誤りか）。また、翌一六年五月三十一日の「京都絵入新聞」に「下立売黒門上る町の亀の家席で頃日西洋手品師の松旭齋天一（二十年）と



云ふ男が興行中（以下略）」との記事も見える。これらの記事からも、明治一〇年代の渡航は疑問視してよいだろう。

(26) 海外のブログ・サイト「tumblr」に「Adolfo Farsari」のタイトルで、以下に掲げる若き日の天一の写真が掲載されている（<http://paispapel.tumblr.com/post/73006989/adolfo-farsari>）。この写真は「生涯」一〇五頁に掲載された「御前公演のため天一が特別注文した洋装」写真と類似するものであり、大礼服姿でサーベルを手にした直立の天一が写っている。原本の所在や投稿者など詳細な情報は遺憾ながら不明であるが、おそらくは天一自身の渡航前に写真だけが欧米に渡っていたことの証左となるであろう。

(27) 青園の「生涯」九〇〜九二頁で「十字形の礫」

として再現された内容は、この『明治奇術史』の記載を転載したものである。

(28) 伝授本や絵ビラを資料として、日本伝統の手の演目を網羅的に集成した河合勝編『日本奇術演目事典(日本奇術博物館叢書)』(日本奇術博物館、二〇一一年)にも、この演目は収録されていない。

(29) 松山光伸『実証・日本の手品史』(東京堂出版、二〇一〇年)一〇八頁。

(30) 『舞台奇術ハイライト』一一四～一二五頁。

(31) 『奇術と私』二四頁。

(32) 『郵便報知新聞』明治二年(一八八九)四月六日号。

(33) 『時事新報』明治二年(一八八八)一月一四日号。

(34) 会期二〇一一年二月三日～二〇一二年一月二九日。『子規の叔父「加藤拓川」が残した絵葉書—明治を生きた外交官の足跡—リーフレット』(大阪府立弥生文化博物館、二〇一一年)。

(35) 加藤拓川の生涯については、成澤榮壽『伊藤博文を激怒させた硬骨の外交官 加藤拓川』(高文研、二〇一二年)を参照。

(36) 司馬遼太郎『ひとびとの発音(下)』(中公文庫)

改版』(中央公論社、一九九五年)一七頁。

(37) 『実証・日本の手品史』一六二～一六三頁。

(38) 『実証・日本の手品史』一六五頁に引用。

(39) 渡米した中井わか・かつ姉妹と北島としが三姉妹であったことは「コラム 天勝や天一の渡米メンバーからわかってくること」(『実証・日本の手品史』二九二～二九三頁)で指摘されている。

(40) リバプールの出港記録を調査した松山氏は、天一一座の出港時期を一九〇四年九月二八日と特定している(『実証・日本の手品史』一六六頁)。

(41) この絵葉書は『舞台奇術ハイライト』では「ニューヨークから日本に送ったプロマイド」(一五二頁)、『生涯』では「アメリカの雑誌に載った天一一座の水芸」(口絵)として紹介されたが、久保アルバムおよび「加藤拓川関係文書」より年賀の絵葉書であったことが判明した。

(42) Gail Jarow, *The Amazing Harry Kellar: Great American Magician*. (Calkins Creek, 2012), 35-35, 49. 「大阪毎日新聞」明治三八年(一九〇五)九月二五日に掲載された「松旭齋天一の談話」によれば、天一とケラーは奇術の交換をしたという。天一は「水芸」、ケラーは「鏡抜け」「化物屋敷」を提供したらしい。

(43) 「北国新聞」明治三二年(一八九九)八月八日の記事に「松旭齋天一骨董を愛し日に二三十の骨董商を其旅宿に集む、室内軸あり香炉あり茶器あり台物あり一として形の奇なるもの色の妙なるものならざるなし、彼は其得意なる奇術を以て金沢城下の古奇物を一攫し去らんとするにはあらずるか」との記事が見られ、「読売新聞」明治四〇年(一九〇七)八月一日の記事には「松旭齋天一は本職奇術の傍今回洋行帰りの子息繁松マサキの名義にて日本橋区薬研堀町十九番地に骨董店を開業する由」とある。

(44) 「天一先生がアメリカで大成功し、多額の収入があったので、ダイヤの指輪を何個も買い、それを両手の指に嵌めて街を歩くので、アメリカ名物のホールド・アップがあつては、との警察の配慮で、天一先生が外出の時はいつもポリスがついて歩いた(中略)ダイヤ入り指輪五、六個をニューヨークの貴金属店に持って行き、それに金をたして立派なプラチナ台の3カラットを買い求め、これを嵌めて歩くようにした」(『奇術と私』六一～六二頁)。

(45) 『生涯』口絵写真。一九〇四年八月七日付。

(46) 松永伍一「川上音二郎—近代劇・破天荒な

夜明け（朝日選書）』（朝日新聞社、一九八八年）
一六五～一七三頁。

(47) 『生涯』一五七～一五八頁。

(48) 『実証・日本の手品史』一六五～一六六頁。

(49) 一九〇四年のデュッセルドルフ博覧会興行に
ついては、天勝が虫垂炎で入院したため、天一
座の代役としてマダム花子一座が出演したとする
資料がある。（澤田助太郎『ブチト・アナコー小
さい花子』中日出版社、一九八三年、二九～
三二頁）。

(50) 拙稿「松旭齋天一興行年表」（藤山新太郎『天
一代』二八四～二八七頁に所収）は、二〇一二
年五月時点での調査結果をまとめたものである。

(51) 倉田喜弘『海外公演事始（東書選書）』（東京
書籍、一九九四年）、三原文『日本人登場』、松山
光伸『実証・日本の手品史』。

(52) 倉田喜弘編『明治の演芸（二）』（八）（演芸
資料選書）』（国立劇場、一九八〇～一九八七年）、
蹉跎庵主人編「見世物興行年表」(<http://blog.livedoor.jp/misemono/>)。

〔謝辞〕

梅原章一、河合勝、久保正夫、西村英之、正岡明、

松山光伸の各氏には、資料の閲覧・借用、情報提
供などで大変お世話になりました。末尾ながら、
この場をお借りして心より感謝申し上げます。

長野 松旭齋天一の新出写真資料について